西史
實傳
伊藤博文
六編
中

へ遠13
1807
17

梅澤

遠へ13
1807
17

正史実傳いろは文庫巻之十七

江戸　爲永春水著

第三十三回

愛ゐおろしき物語りなり塩谷の家中にて其名を高田軍兵衛とやいふの小役人を勤めしが性質いと悪しく世の人に忌嫌はれ世の人の先を潜り抜けて其折ハ人をも勤めさせても人の先を潜り抜けなどひがうしき変ゆへも小気味よく取捌きもち

とも用立者うまども其為ところ実情あらば主人の
為と見せかけて自己が田へ引く変のこゝろもて
速く迯道をこゝらへ来きよりあるを忘おこゝへば
いさゝか他の恩を受ぎそのうゑ権家に取り入り
ゆも分九郎がごとき者ゆへ彼が得つくるを斗て
其欲情より心ゆ悠ひ大星がごき忠臣ゆへ其為を
もつて取り入るべ気くハ是ゆ欺きて心をゆるし
者もなりしゆ良を勘ハ思ふ深けまば軍を清が

言葉多く粧飾するを用ひざりし
とぞきる白者ゆて なりしゆ大変ゆて既に
籠城ときまりしときも一番に駆付け番刑帳
ゆも軍を清が貴一番ゆ孫きまて表面ハ忠
義と見せかけ内ぞとのゝぐ討死と口にハ言ど心ゆハ
表裏を窺ひ若第一殉死 討死と定らば用今を
捨あとうひそうゆ城を逃出さんと心うまを
けるきまべこそ義士の面くに金配かとるきハまり城

退散の頃まぐハ忠臣義士と唐くうしが対入のまん茶
進義小山等と倡倶ハ不理屈を言ひ出し終ふ盟
約をとひきしが義士等貴尾ようく敵を討て亡君の菩
提所圓覚寺へ引揚る極みを軍を陽速くも愛
出しと其道筋を考へ合せ其四八隅の近所に待
うけ義士の行列の来るを見るよう 軍「表海岸ゆも
おも拵こと 愛お茶所でござるませう ヤレ〳〵 天晴み
ハ働きト一個こゝハ挨拶まれども皆軍を陽ゲ不義を

悪ゆ雖一人善る者多く賞うる様しと待くしが其
中にて折紙矢を陽が 矢へ我く四十七人ハ盟約を堅く
亡君の仇を報ひ只今引揚るとろうんバ余人の
挨拶ハ無ようぬト言ふを軍を陽おゝ〳〵久〳〵 軍ハいろ
まゐ ハ先の風しゐ私ども先達て 進義、小山
等ハ志ハ連中を 連中を 浅ど其後
陸く考へく見まゐハつまて ハ連中を 浅
のを 陽くぐんじまゐ けまゐども今更改ゆ

軍兵衛
浮藻途ホ
義士の引揚
祝さ

矢兵衛

軍兵衛

下さるとも中さるべふと四人皆まて賢い国八幡へ日
参をのこ〳〵何卒各方の首尾よく本望をとげらる
やうと祈誓をかけまゝこゝ陰ゆの今日はいかうて
出見ふくるもいまゝ武運ゆ尽る処とかりくく
ぜんぐまゝれバ是より直ゆ八幡へ出参ぜんと
参りぐどぐかまへどふぐ武士元老たちゆ皆くさゆへ
笑〳〵ハト言ふを半分安ぬぐ矢を落ハさゝ〳〵
ゆくふぐ軍勢ハ是にも参りず一樽の酒を抱て

国覓寺ゆ参ひきて門番を怪び出し我等大事田
軍勢とのふものゆ今日のおゆ掛を統とる
見ハお労を体あと思ひ酒一樽拵参りしゝ
望どのを大ぐゆ各ゆも お見ふ 掛りうとのふにぐ
門番ゆ武士義士等ゆ待ふ是ハ若者ども ハ関ゆ人ぐ
ハあゝ面の皮の厚い男ぐ先刻ハ途中を騒ゆく
後をさすゆ御ゝへて居ぐ武所へ来ることを
幸ひ不義の奴等の見せしゆ 端教をうぐハゆる

まつ・へる孤毛ハ社い屢〻切りて八刀の疎れゆゑ
溜敷をうとハ思ひつきりを我くゞト立よるを生長を
助が押とゞめ申し毛ハ左方那世りる人非人ハ對
面をるも月の疎れ酒も入有ものとふて速く追ひ帰
きるゞしと言ひつく更に承合ハれば彼軍を陽も詮
方なくをどくとして立去りける

此一段ハ義士等音川家ふ出頃けの物りまろ矢を陽が
物語り仕折内の某が聞しとなるを主侯ふ紀せし

第三十四回

昔の人の言るるひり命ハ天ふ有るふ有るまゝ只其人ふ在と
ふ是汝ふ出で汝ふ還るものゝり世ふ降ふ庸医のみふ
癒人ハ殺替のゆき命を生ひやまらうまく論ふ来ゆゑ豊
あまれざるんや学ま文言ふ一を故人の法術の論をあるまゝ只
楼威の勢ひふ素じを薬品の能を毒ハ兵へを身上の配剤をのと
ゆを病人を治やまらされども子へる某論ひて全快をるを
まれ行束の鉄地玉横ぎら方のまぐれ学り思ひぎを病を治を

いろ〳〵を過ちの言葉とのみ古人理を責て其法を立ん事
果の調合へあの〳〵薬種の功ひろを互に持合て安き病中
さまざまの加減あり古るを我得ぬ療ふべ此一味の薬〳〵験が
痛くはかゝべしと主調合を入替そと己が供屋の上わざ
用ゐん其功能の薄きふ似ざる蛮人大根も煮て喰ふ時へ
その味甘くあるいとせで喰べ其味辛し茶種も是の黒きを
毒茶蛮ど茶とゐん稀ふ[illegible]ひろと盛ゐべ茶を以て煮
いやまり茶を遠へいと多ゐん権威を上貴とも長崎ふ家廻り裏

卑の給金も新出代ぜ[illegible]勘定自分袋で病人の汚れを
除こ[illegible]礼を[illegible]あせ[illegible]医ふ[illegible]を痛され歎れる法ふいみ
義医者ゐ猫を盗んゞ猫ごとの[illegible]茶宮さん持されぎ[illegible]る懐へ
押込て[illegible]ふ欠歩ゐ貧医ふ[illegible]良医もむん命ゞ
惜くゐ扨の人をゐ[illegible]茶を茶ふ[illegible]ぎされゞ[illegible]ふ
扨ゐ定規をいゐ可ゐ麦ふ鎌倉本座の[illegible]町の大医
ゐ表へ僕の[illegible]と物重の中を痛て長家門表[illegible]へ
造ゐ大紗綾形の腰張もいろを糧立流のゐ

主利用合

四時限り遠方の病人頼り来れば
張出しする高の師直が抱へ医者浮世野蝶庵と云ふ
名ある医者なり取次の若党が表居を渡りて人に
今青山辺の者なるが出でざるまゝ尚人に同道いたすまゝ
容体を上お茶を出さるまゝ尚人を召連れ来りまゝ
お同道いたして委しくお上さんの
茶飯も同様なる家へ通されて
青山のおすまいの通り成まゝ

ども羽織小袖も相変の身のまゝ表居敷に
さげる 嫌へ黄張り青山の四位々々
私い青山辺のものでおざるまゝ私親類どもの将を請人に
立まゝと本町の茶種店へ奉公ふつゝ
上とゝまゝとぞんじも寄らぬ口先まゝ療治で本服の
まゝとるの茶を頂戴いたし度ぞんじまゝ 勿論尚人に同居
いたしまゝ嫌へ遠方ゆゑ遠方ゆゑ見て茶を進
ませるが全体殊の外お病用多く新親の病人に

ちゝ此方へお出さえなされば療治へして進ぜまらんぞ爰のさ
めそのお方めへお耳へ入て直りぐござるテ ちゝ医者 身命を
つゝゝて見れば甘味ゞ有まねど逆上一度乱心癇症へ実へ好
ものゝで此方よろ望んで療治して也迷惑でも直して進ぜらぐ
潮来節の文句に琴者の落れと深山の樵取やり見べ
さて次手ゆゑごとのゝ人武天皇の時代尚時一貼かわど
一ト回りの薬と極て金銭沙汰ゆへ出ませねど代の出戻りと
中てへ引張りものわけど病人ゆよりて茶瓶も売る價ゆ長

ねべゆゑ いゝ茶代ゞゝて極て金ねべのうゝ少べテ安でも病
家ゞ貧ひ人 調合を仕まへ昼ゞ出ゞ毎日夜更て得るか
とねひ旅へ松者のゝ也病家武蔵ざゑとのゝ閑ゞ
きえゝゝ茶ゞゝ「その茶へゞゝ也ゝ出ませ金使さえいゝまべ前
金ゆさゝ上まべ私方の病人へ老角真珠の代を下さゝ日ませ
と中ゝ口癖でござゝまべ 嫌ハテ孫ゞゝ病症ざ者症ゆ孫
ひゝゝ胃の病症歯痛の病症びやゝ症るひまゝ閑育の
療治へつゝゝ見非真珠の虫のせゝでゆゝ「安へ獅る身中

ゆ
の虫と中もち酒湯でどうもしかたなく　婦人元の藤相とかけるゆ
どうる一四り茶代金八両でどうがどふであざらん「モ此三高也
で冥冥どうどうもん　婦「ちろぶ六両「モ此わしきりあるろ
ちの安うどうもん　私の方うぶ七両さ一出しさ色ん左様ろふ
明日為人を冥度いろうもん七身分の茶代金四両さ一上げま
せうト直度せきめと性庵の接客一彼町人へ渡ろう「あ
然乳いこぢんもひ病家ごと初のあるひぐるければ常ふ呑ろを
さまて理草がろハハテ堅貝へ身分の金八両分ふあるる逢ぶ

ろけまバトもひゴトおりうふ家のろの九ツの時分チャンしく
此海母野性庵とりろハ元来橋及赤穂の者ふて堀
分家の賣役小野九太夫ゴ中ろり壮年ろ身持放埒
ふて君の勘ろを義ろ用を遊れ　縁金ふ求ろ医者とろう
茶表智地面の夢冥賀巻ふ嫁入の様人七世を流
まども表ハ医者のろれバ古主判官の敵師直ふろ入
さゆゴふこバ人ろバ師直ゴ性威ふて出入多数多く此金沢
町ふ家此七威勢をろふ身とろければ居ろふハ陸ね

唐本と稜々書き得たる奇物をもべ売ごる方医と
いふは家相のうと思へ仲景と扇の異名時珍といふは
七の雨ふ四ッ目垣ことの人歌を詠ー人ものふ本草綱目と加
古川本草ハ肩目の人うと思へうと七を持ー熱有ふ七ん命
出る苦労もるー那へふ部同ふれど只世の中を渡ふして
口先だうりで病人を騙ー込むことを花ふけ是都て
青山の町人ハ懐庵ガ貪欲ばって慾ふの
うふうふ世病人を連て来ると熱く薬を

呑込ま世其次の日ふ本町ゆ一番大きい薬種
屋へ慾き懐庵の偽ふ紙をさー出ーるから町人一其
ふ紙の品ガ急ふ入用ざらう私と同道ふ見世の
お人ふ持ーと賜戴ーとお呉ふ世ト言へまて来
種屋の亭主ハその紙を漢ー亭ーへ工真
珠ガ出入用と見へましるふ極高ふをとどぎるまして
うう宿ふ有合世まし所を稀く原交まーて出覧ふ
入ま世ま世う町人へ危ふ角ふ多ふ狭いとのふりで

蝶菴が
貪慾
霊狐を
計らん

私と同道ゐ持て来て茶人と言へ是まで〻亭へ〻〻〻
今直ゐ此同友のことさせまをうト言へ〻〻〻店の者を
呼びて其由を言へ閑せ土蔵より真珠を取り出すれば
店の若者ハ身仕度して若ハ大きゐお結せりゆー
ちと浮具遊さるゐと主伝のハうち金沢町ゑ〻〻〻ま
町人一角の長屋門の内サト言ひつ二人ハ連立て縁
庵の家にのこ見べ那町人ハ玄関ゆて真珠を清とり
侍奥へのうりしゑ姑くして出来り町人今ゆいゆく山用

文でゆー〻間取是まで〻ゐひろ人でおぞれ今ゐ沙汰が有
マア一ツぷくト負分ゐ火鉢の傍ゐ坐ーけるゑ女て彼町人ハ
ゐ水場へ入ろ此見へわ悪ーく茶取病人ともゐ多く入ろ
ゐ多ろ〻〻〻縁庵の茶ゐ出茶を茶ゐ女有て彼青山の
町人ゑ同反せー若者の来ゐ有りければ侍ゑ宅内ハ何合
場へ通ーける縁へ町人ハ本町の茶種会ひとゐ久まゐ〻〻〻
元ろ〻〻〻

まあ此方今さっと上がりまして真珠がお気に入りまして代金の
のご発達でございますトのお様方うちうのごとき 様へ業おく
そなたの表のごとき病症ご承知なるも 若へ乃業知るも
ようくとぞうございます あなたはいつまでも居ます 様へ三千世界
ものごとの是のも業を進ぜるゆへ 容体を見ねばならぬト 主関
の方へ向き 小弥太〳〵ト取次の侍を呼び 様へ此本町の若
元の風儀と青山の 仁ハ治様しと早く 変へまさきの ものと
のうなり 小へ〳〵 此方へ水湯をうつ 早くまもなく長へ行れまして

様へ三千世界ものご 弟へ 私も遠方でどうぞ真珠の代を頂
様へ 此方は左様に生来病症の美しいと ゆーと 様へ貴
様を同様と男は貴様の親類で本人の 様人でいらっしゃる 此
此方へ見てどうぞ病のなるを ゆー 今日連て来るの
療治と早く願まれと 真珠の代くとりあげ 全体病症
ごとのようご様を治くせども 変へ寄りて容体とくと見て
薬を加減と 進ぜるの 私は青山の親類へ 変へ
見ますと同様 ものの此方の 様へ三千世界

時もるい遅上の症とのふものへ聞ながらの困る乳遠へやど
叔父つるひむくへものへ入らへトーへ人ば薬種屋の者賜を立一乳
遠ひとん私のうひでぎうまたうを真珠の代さへやとれへ乳遠叔
父へ及びまを代金をやきうまー嫌へ貴さあへ乳の遠叔
うりうぎも真珠の代を叔父へひが病ぎそまぐ遅上ぐ若へ手ぎの
なぐ遅上ぐうまれさのぐぎうまたを高金の赤お叔父きれぐまを代
金をやきれと中せば夫が病赤ぐ〳〵と金ぐもお渡〳〵きれぐ
ぎうまうを思をぐおぐうまたお乳へ入日ぎぐへ真珠とお遠

ぐぎうまー時刻が遅くぐうまうとへ親方のあがを軍ぐぐう
まをぬトのへば嫌房ひうとーを嫌へ言へせを表ばをとのおをぬとと
此嫌房ぐを方ぐう真珠をうが寒物ぐ外乳遠ぐればを外
病人ぐ来を居ぐと外国ぐ迷或ぐまうを乳遠へへ遠遠ーを
仕事へ畢竟金ぐ両前金をやーを摩治を頼へをとのへ人直を
出へさをと言をのぐぐ其上ぐぐまぐ頼へぐ為へ人へおぬへ人ぐぐを
ぐ乗ぐーへいまをへの町へぐ町へぐ人ぐ新へ形へをとうはへをを
ぐぐうまたを仕度へぐぐまうを直ぐまを若夫へ行ぐを方の

ごろうて
四勝負のお供しへ跡ゆきろまりて真珠ろう合なのうくまる早く
思やをも取扱ひきろうまり　煙草屋の長い貴さるの亦乳ご支さ出さ
年のとのふのご　若へ見いあまへ人さるへ私をお粧ろうきれ出ぬ今和
見世さで四文通ゲぎろまりとト懐ろう煙屋の紙をろう
年へ　こんを四覧ひきろうまり　ひろさの四名石で私方店の名前ゆ
相遠いぎろうまぬ真珠も扱ひ　北八六双ろう三十双後切揃
別の伊勢真珠と紀州と四覧ゆ入まりと其へ真珠を寄へ
きれて四覧ろきれべろうまり　差出をの紙へ元来ろまの

煙屋も年へ信じろぐく能ひりや彼町人が騙漏ろんぞろハテ
今夜の切ぬと思べひりとや久兵衛が若い者へ遊上の病人きらぬ
言葉のそりぐくろをきまぬまそ吐息つまぬまメそろるぞろう
見ろう煙屋へ茶摘屋の若い者と交ゆの指来をろうゆ
彼青山の町人とのひへ煙屋の名をろう仮の紙を持て本町の
ひりとや久兵衛とのへ茶摘屋を騙奪代金三十両の長屋
変詐取てその後紙を煙屋ゆ抱しろう新をわぐきろうろう
ねべ茶摘屋の方のへ煙屋の名紙をのて公聴ゆ訴出んと

きびしき掛合止ざるけれど、從來嫌惡の身が蒙惡ひられ、大の迷惑七月分の扶ひとり見もせぬ真珠の價を拔けれども自然と世の風聞とりけるゝぞ却説序開伝ふ

鉄砲洲の住居の眼病を然れ既が療治もうるへざるを原元辰（数年の愛多）の方へ下る元助多く得給き真珠を持ゆきて療治をこのみけれども漸が病全復せんとて元助が傳合右の如く

が國元より尋来る看病おとこ実義を尽くしが中途にて妻子が死が下る元助傳合方へ尋ね来るべき家僕元助

二個が者傳合方への看病せし元助が一通の書面を残し

うき消さるく失ひけり其文の写し看官左の如し

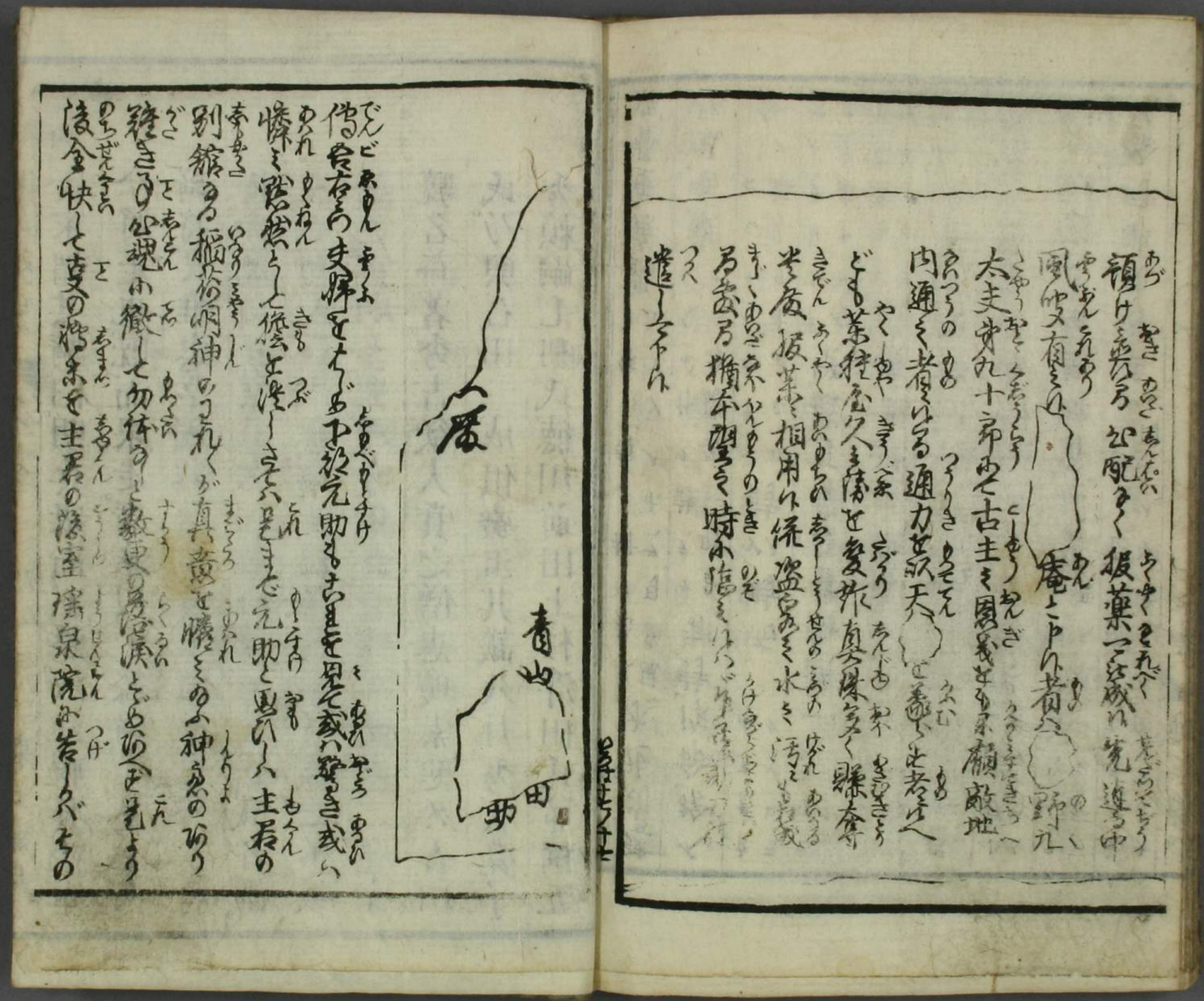
是迄伝ふ元助と姿現し貴家へ看病

致しけれども此度國元より家内の者元助

召連れ別宅早き厨の外に

見もとる有り眼病も追く全快と相成へしも

ひと加養も一ヶ年あれ元辰方へ深沢山



領け給ふ公卿 狩葉ハ成れ荒廃の中
風雅文有ると
庵とゝの者ハ 第九
太夫光孔十郎ハ古主ゝ恩義ゝ忘ル顧敵地
内通ゝ者ゝ有る通力ゝ天 義ゝ比者ゝ
ども業往ゝ久ゝ陸ゝ変所ゝ奪ゝ
光度 狩葉ゝ相用ル俵盗ゝ水ゝ
弓矢弓 横本ゝ時ハ
遣ゝ

偽 支脇 元助 ハ
憐ゝ 元助ハ
別館 稲荷神
縫きゝ 公魂ハ 徹し 切体
後金快し 支の 主君の 陸室 瑞泉院ハ 若ゝ

梅澤

神徳を尊ぶべきのみなり。その後義士の面く年望を遂しかば稍神
慮の験を開るらんとそ正一位元助稲荷大明神と今の波地の
宮ゐ初りて里人の口碑の残りしを元助稲荷の垂迹紙ハ
某とゝの宮正の家の今ハ伝へてはりとゝ文へ
亦曰此片岸人元漢倉の宮殿の後函元の
住居再度漢倉へ出しゝ但一位のゝ元とものろく
為命つゞきてあるもはりとゝ

正史
実傳

いろは文庫巻之十七終